

# 翻刻『俳諧百家仙』

田邊 菜穂子<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学非常勤講師

## 【キーワード】

近世文学 俳文学 芳園 俳諧百家仙

『俳諧百家仙』を翻刻紹介する。芳園編、鈍雅画、寛政八年刊。本書は当代の俳人の句および肖像を一人分半丁に収めたもの。収載句数は版によってかわるが、一二二から一二六句。『万家人名録』などの類書には見ない俳人の肖像も収められている。

諸本に関する詳細は別稿を用意するが、いま粗々その伝存状況について言及すれば、国会図書館、東京都立中央図書館（加賀文庫）、立教大学図書館、龍谷大学図書館（写字台文庫）、天理大学附属天理図書館（綿屋文庫に三種）、舞鶴市立郷土資料館（糸井文庫）、初瀬川文庫、東京藝術大学附属図書館、ニューヨーク市立図書館に所蔵が確認される。これらは、刊記や序文の有無等により、大きく二種に分けられるが、その出版の先後等についても別稿で検証することとし、今回はそれらのうち落丁がほぼない国会図書館本を底本とした。

## 〈凡例〉

翻刻を行うにあたり、次のような方針とした。

一、国会図書館蔵本（請求記号188-19）を底本とした。  
一、原典の表記を尊重し、漢字については旧字・新字の統一を行っていない。

一、清濁は、原本のままであるが、序文については読み易さを考慮し、句読点を私に補った。

一、できるかぎり板本に忠実に翻刻したが、収載されたそれぞれの句は散らし書きとなっているため、煩雑になるのを恐れ、行送りについては一句一行として表記した。また、各丁には作者の姿絵を収めるが、これについても全て省略した。

（例）春の海 燕村

終日

のたり

（画）

かな

□ 「 2ウ

春の海終日のたりくかな

燕村

□ 「 2ウ

一、ノドに示された丁数は、「□」のごとくに示し、全体を通した丁数については「」1オ」として表（オ）裏（ウ）の区別を表した。

一、便宜上、収載句に通し番号を付し、アラビア数字で示した。

〔書誌〕

書名…俳諧百家仙

所蔵…国会図書館（請求記号 188-19）

表紙…浅葱色、模様なし

寸法…縦二六・二種、横一八・〇種

題簽…表紙中央に「俳諧百家仙」、無枠、

縦一八・七種、横四・〇種

匡郭…序…縦二一・四種、横一五・〇種

2ウ…縦二一・三種、横一四・八種

柱刻…なし

丁付…各丁裏のノドに「一」〜「六四」

丁数…全六三丁。序一丁半、本文六一丁、白紙半丁

序末…「寛政丙辰稚九月 浪速玉やしろの禁 黄華

菴升六識」

奥付…「續百家仙未刻

浪花書林

塩屋喜助

寛政八丙辰

帝京書林

著屋儀兵衛

本屋宇兵衛」

広告…奥付に「續百家仙未刻」

蔵書印…「帝國圖書館蔵」（序1才）、「圖／明治

三三・三三〇・購求」（序1才）、「帝國圖

書館蔵」（2ウ）

〔翻刻〕

俳諧百家仙

「題簽

「見返し

序

道は五十年にして衰へ、はた百年にしてふた、ひをこれると

か。吾はせを翁の滅後、既に月往日過て、や、も、とせにあまり

るこのころや、俳諧の道ますます／＼昌んにして、なにはに二柳あり、ミヤ

こに闌更あり。其外、天涯海隅にをしをよほして解ほる里

／＼、いさなとる浦／＼ハしも、しらくたらのこと國まで俳哥をうた

ひ、大和のかんなをもてあそふてふ。しかも此正風を慕へるとかや。いて

や、此時に遇ひて風流の隠士丑磨なるもの、なにはのあしまにしひ

かねて、諸邦の俳家にひめをける摩尼の美玉をひそかにかいつら

ぬるに、殆も、にあまりてければ、こを小倉の百首に效ひて

ミつから百家仙となんにつけて、そを予か机前に投して、これか

序あらむ事を需て、草蘆三顧のせめ避るに處なし。こ、におゐて

難すらく、今天下の俳士、其英才なるものなんそも、に限へけんや。伊豫

のゆけたの算へも尽すましく、まひてミそかの月の人しらぬもあまた

ならんをや。さらハ管見の譏り、偏怙の罪遁る、よしならんか、あまさへ

おのれをも其一人にかすまへたらんハ、いかて世の褒貶なからむやと固

く辞するに、集者陳して曰、そはそれ、理屈の論にわたりて、吾俳諧

に嫌ふところならずや。今この百家ハかねて遠く金聲玉韻の

響きあるもの、或ハちかく見聞せる清辞麗曲の馨ハしきをとむる

のみにして、特に撰出せるにもあらず。是た、無分別の筆頭にてぬ

れは、其責なんそ師に預らんや。唯、洒々落々の境に遊ひて

好悪是非の私を忘れよやと、一喝して去よと見えしか跡、し

ら雲の行衛なくなりて、た、此一冊子そ座右に残れり。か

くてあるへきならねは、終に其趣をかいつけて更に物

翻刻『俳諧百家仙』

浪速玉やしらの桢  
寛政丙辰種九月  
黄華菴升六識

24	咲花のこほる、萩の下葉かな	喜齋		14才	51	としの瀬や車にちかき京のふね	雲郷	廿七	17ウ
23	名月や親子さしむく人の家	成美	十三	13ウ	50	泳は川幅ひろし穂の風	ゑん	廿六	26ウ
22	春の人これも柳にかくれけり	臥央		13才	49	さむしろにこゝろのおくの月見かな	一素	廿六	26ウ
21	蛩来よ我草の戸の闇かさむ	方廣	十二	12ウ	48	降やんで雪さはかくし成にけり	菊明	廿五	26才
20	厂かねの風にかゝらぬ聲もなし	斗入		12才	47	立山やゆきのうへより夏の雪	玳卜	廿五	25ウ
19	稲妻やこほれあハする松の露	花縣	十一	11ウ	46	月雪もおなし雲よりこほれけり	椿堂	廿四	25才
18	灰よせて佛つくらむ冬の雨	宗讚		11才	45	こからしや廣野のすゑのみしか山	雲帯	廿四	24ウ
17	白きものは骨髓白し秋の花	丈左	十	10ウ	44	夏の水うつろふ雲もなかりけり	無曲	廿四	24才
16	限かなき海に對して秋の山	騏道		10才	43	廣澤や霧におちこむ夜の鳥	武陵	廿三	23ウ
15	梅の花蒼こほる、癖のある	三千彦	九	9ウ	42	秋の夜や世はさまゝの高わらひ	平角	廿三	23才
14	みの虫を聞夜や希に入こゝろ	石蘭		9才	41	ゆふ顔に爺なきむすめそたてけり	子坤	廿二	22ウ
13	闇の雪もの、影より見えてふる	長翠	八	8ウ	40	短夜や松の光りは月か日か	馮月	廿一	22才
12	しら菊や色あるものはさめやすき	五圃		8才	39	ひろはまや潮明りにほとゝきす	魯隱	廿一	21ウ
11	おし鳥は一夜わかれて恋をしれ	旧國	七	7ウ	38	中ゝにはな草ゝそ市の秋	獲車	廿一	21才
10	花の山守ると思は、住侘む	完来		7才	37	初穂や處ゝに枝のとり	蕉雨	廿	20ウ
9	名月や浮世に曇る人の影	重厚	六	6ウ	36	誰となく友のまたるゝ月夜かな	素郷	廿	20才
8	船慕ふ淀野の犬や枯尾はな	几董		6才	35	昼も寝て散を見ましさくらはな	蛭卧	十九	19ウ
7	戸口より人影さしぬ秋の暮	青蘿	五	5ウ	34	ゆふ霞我馬なつむあゆみかな	辰州	十九	19才
6	長ゝと <small>（枕）</small> にかけたり菖蒲賣	白雄		5才	33	西に見る夜は道なから夏の月	素檠	十八	18ウ
5	白魚やあら浪かゝるものをなす	麦水	四	4ウ	32	小田の鴈雨は夜くせと成にけり	雙鳥	十七	18才
4	梅か香に驚て梅の散日かな	樗良		4才	31	西と見えて日は入にけり春の海	百池	十七	17ウ
3	ほとゝきす一聲夏をさためけり	蓼太	三	3ウ	30	春そとて出れば見ゆる柳かな	巢兆	十七	17才
2	春風の夜はあらしに乱れけり	暁臺		3才	29	枳のはやしに冬の入日哉	五来	十六	16ウ
1	春の海終日のたりゝかな	蕪村	二	2ウ	28	聲きゝて鶯うつす鏡かな	しら女	十六	16才
					27	長生の恥も思ハぬ花見かな	諸九尼	十五	15ウ
					26	よしきりの聲ふみ行や淀のはし	九十	十五	15才
					25	名月のをしくも照らす深山かな	可都里	十四	14ウ

78	村時雨玉味噌つらぬ里もなし	壺仙		41才	105	鹿鳴てなめられけり夜の山	瓦全	五五	54ウ
77	雪にして柳に残るあらし哉	芝峰	四十	40ウ	104	萍の實もと、まらず秋の水	奇測	五四	54才
76	春の風人のあゆみにおくれけり	魯稿		40才	103	閑居鳥草山高き昼の月	蒼虬	五四	53ウ
75	煤掃やあしたのあらし暮の雪	松蒼	卅九	39ウ	102	咲ならふ木槿のはなの底曇	貞松	五三	53才
74	方丈を吹ぬく蓬のにはひかな	翠實		39才	101	名月や故郷の空も水のうへ	若翁	五三	52ウ
73	賤の女かあさく濁す清水哉	和交	卅八	38ウ	100	人去て鳥立てはなの月夜哉	千影	五二	52才
72	骨髓に寒きすかたや枯柳	あし丸		38才	99	芋のこの子はこてすませ後の月	丁江	五二	51ウ
71	菊の名を八日あんして定めけり	有光	卅七	37ウ	98	棚はしの道とも見えず雪の暁	志諺	五一	51才
70	いたつらに翌まつ日也はるの雨	江蓼		37才	97	シミく／＼と山を見にけりほと、きす	右稲	五一	50ウ
69	宵月や昼のあつさを語り合	子諤	卅六	36ウ	96	名月やうかれを工むむかし人	東瓦	五十	50才
68	穂の水月一輪のひかりかな	東亭		36才	95	おもくろひものか降ふそふゆ曇り	蜂友	五十	49ウ
67	蓬萊の影より人の朝日かな	加玉	卅五	35ウ	94	月落て物奪れしこ、ろかな	宰町	四八	49才
66	海山を思ひつくして宿の月	暮蓼		35才	93	花さくらひとり夜のなき風情かな	于當	四八	48ウ
65	しくれ行かたは苦屋のともしかな	槐路	卅四	34ウ	92	蚊遣艸紀の舟乗かもて来たり	柳莊	四七	48才
64	水鶏啼や妻戸明れハあふひの香	龍山		34才	91	つやく／＼と梅散夜の瓦かな	樗堂	四七	47ウ
63	初雪やしのひ歩行の夜は言はず	文暢	卅三	33ウ	90	雨乞や寐鳥のさやく山の奥	八重	四六	47才
62	節季候に追ハれなとしのから車	止雀		33才	89	初雪や柳にはまた降たらす	花暁	四六	46ウ
61	七種や朧夜かけて指揃ふ	熊三	卅二	32ウ	88	露乾く草の匂ひのあつさかな	麴車	四五	46才
60	唐辛二葉は君か手やふれし	如流		32才	87	夏の夜は夢の中より明にけり	芦涯	四五	45ウ
59	植込もみとり添つ、門の奈	岸芷	卅一	31ウ	86	銭投て宮居を雪の舎りかな	一瓢	四四	45才
58	山鳥や長き夕日の尾に残り	可友		31才	85	流木のなかれと、まる霜夜哉	馬涯	四四	44ウ
57	ともし火の先に風あり夜のふし	方壺	卅	30ウ	84	峯巖野ゆけは草にこたふるきぬた哉	野角	四三	44才
56	さしむかふ日も静也枯尾花	蕉里		30才	83	夜半のしも寝顔に風はいつこより	淇竹	四三	43ウ
55	鶏のむし追ふ上や梅柳	朔宇	廿九	29ウ	82	砂川やあたに流る、春の水	雉章	四二	43才
54	ゆふしくれ主呼ふ牛の野飼かな	才嬌		29才	81	きりくす啼し音に朱の鳥居哉	歌焯	四二	42ウ
53	春風や浪花を水主の片手漕	李山	廿八	28ウ	80	香をきく鼻息高し夜半の穂	春伴	四一	42才
52	鹿の聲端山の雨となりにけり	春蟻		28才	79	や、春もしたり柳のしたれ梟	芹水	四一	41ウ

122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106

水の後橋もかゝらす枯尾はな	紫暁	55オ
梅か香やされと風にもしたかはす	青橘	55ウ
山茶花の終に乾かぬ一重かな	瓜坊	56オ
蚊帳ひとつ持てうるさき起居かな	駝岳	56ウ
立忒れはしつむかことし夕さくら	甫尺	57オ
初若菜かた野、たより聞日哉	都雀	57ウ
乾鮭や打てハこたふる人の充	車蓋	58オ
引汐のはてなく霞む海邊かな	玉屑	58ウ
鶯の小顔つん出せ初しくれ	羅城	59オ
植かへし櫻やしなへ初しくれ	升六	59ウ
名月や夜の浮世は美しき	定雅	60オ
つくく〜と見て居れば散る桜かな	士朗	60ウ
田鶴の音にとしく〜暮ぬ和歌の浦	月居	61オ
ゆふ暮を店さす秋となりにけり	嘯山	61ウ
ミな古き鐘の聲也しもの朝	蝶夢	62オ
うか〜と生て霜夜やきり〜す	二柳	62ウ
薪畫て門を出れば春日かな	關更	63オ
		63ウ

續百家仙未刻

浪花書林

塩屋喜助

寛政八丙辰

帝京書林

橋屋治兵衛

著屋儀兵衛

本屋宇兵衛

〔補〕

刊記の異なる初瀬川文庫本（国文学研究資料館所蔵マイクロフィルム（ハ三一三二一〜二））による補遺（ただし初瀬川文庫本には落丁が多いので、異同の確認は行わない）。

①国会図書館本の序一行目には「序」とのみあるが、初瀬川文庫本には「百家仙序」。

②通し番号91、92の間に二句（二丁）補われている。丁付は黒に白字で「又四七」となっている。

123 恋猫のなともならず戻りけり 梅價  
124 瀧曇るゆふくれなみや焔の山 桃李

③通し番号111、112の間にも二句（二丁）補われている。丁数は示されず、困いの中は黒くつぶされている「■」。

125 朝す、し掛ものかえてかしまる 青鯉  
126 朝す、し掛ものかえてかしまる 青鯉

④本文の後、すなわち国会図書館本では關更句掲載丁の裏（六四丁）裏に、芳園による「後叙」（半丁）を付す。こゝも丁数は示されず、黒く塗りつぶされている「■」。（句読点は私に補った）

後叙

おほよそ感ずるもの多かる中に、人の  
こゝろのまこと言葉の花ほと感ふかきものは  
あらし。その感に感をかきあつめてひとつの  
ふみのやうになりたるを、まつ百家仙と  
唱へそめしは、なを千家万家の感を聞得ん  
との志也。必よみたりに撰出たるおこのものとな  
あさみ給ひそ。

「後見返し」  
「裏表紙」

芳園述

④奥付が異なる。輯者、画者の名があり、書肆は塩屋一軒である。

續百家仙未刻

輯者 浪速 芳園

画者 平安 鈍雅

寛政八丙辰

心齋橋筋南久太郎町

浪荅

塩屋喜助梓

「後見返し

〈その他〉

国会図書館本三二丁の丁付について。前述の通り、本書の丁付は、柱ではなくノドに、数字を罫線で囲った形で示されている。三二丁の丁付は、本来「卅一」とあるべきところ、前丁と同じく「卅」となっているように見える。「卅」の下に横線があるが、これは数字の囲い線のように見え、判然としない。ほかに参照した東京都立中央図書館本（加賀文庫（七八二九））でも同様であったので（初瀬川文庫本では落丁、舞鶴市郷土資料館本はマイクロ複写したものを参照したため、ノドの部分が隠れて確認できなかった）、ここではとりあえず「卅」と示した。

また、底本とした国会図書館本では四九丁が落丁している。ただし、底本のほか今回参照した初瀬川文庫本、さらには国会本と同版と思われる東京都立中央図書館本および舞鶴市立郷土資料館本（国文学研究資料館蔵マイクロフィルム 七八一―一六―八）でも落丁、未見であるが、立教大学図書館本も同館HPに「飛び丁あり…四十八丁の次は五十丁」と四九丁の落丁を指摘する。四九丁はもともと存在しないのか、管見の限り、いまだ四九丁に巡り合っていない。